

媒体と文体

ゾラ『恋愛結婚 *Un mariage d' amour*』(1867)と
『テレーズ・ラカン *Thérèse Raquin*』第二版(1868)からの考察

宮川 朗子

はじめに

ゾラの初期の代表作『テレーズ・ラカン』は、書籍版で発表される前に、文芸雑誌『芸術家 *L'Artiste*』に『恋愛結婚』というタイトルで発表されていた。この小説は、同じタイトルでフィガロ紙に掲載された短篇に手を加えて長編に仕上げたものだった。この小説を質の高い作品として仕上げようというゾラの意気込みは、『マルセイユの秘密(*Mystères de Marseille*)』の序文の中で、

[...] lorsque le matin j'avais mis parfois quatre heures pour trouver deux pages de ce roman [= *Thérèse Raquin*], je bâclais l'après-midi, en une heure, les sept ou huit pages des *Mystères de Marseille*.¹

[...] 午前中、この小説[=『テレーズ・ラカン』]の2ページを書くのに4時間も費やしたのに対し、『マルセイユの秘密』は、午後1時間で7、8頁やっつけた

と当時を回想していたことから窺えるが、さらに、1867年2月12日、編集者のアルセーヌ・ウッセに宛てた手紙の中で、「Le feuilleton haletant, coupé chaque jour, des journaux quotidiens ne me convient pas.² 毎日分割されて発表される、新聞の息が切れるような連載は、私には都合がよくない。」と要請したように、発表媒体にもこだわりを見せていたことからわかるだろう。このゾラの願いは聞き入れられ、ウッセは、当初、『十九世紀 *Revue du XIX^e siècle*』誌に掲載することを約束したようだが、こ

の雑誌の廃刊に伴い、この小説は、『恋愛結婚』というタイトルで『芸術家』誌に発表される運びとなる。いずれにしても、ゾラは、この小説については、新聞連載のように、作品が時には百回以上に分割されるような形式に適った書き方を意識しなくて済み、かつより絞られた読者を対象とする文芸雑誌に発表されたのだが、果たして、雑誌版は、書籍版と変わりが無いのだろうか。新聞と雑誌、あるいは書籍という媒体と小説の構成や文体にはいかなる関係が認められるだろうか。この問題を検討すべく、この小説の雑誌版と書籍版とを比較してみたいが、書籍版は、第2版まで視野に入れることになるだろう。この方針は、一見奇妙に思われるだろう。というのも、純粋に媒体に起因する差を見るだけなら、書籍版の初出で、発表時期が雑誌と近い初版を重視すべきだと考えられるからだ。しかしながら、先に註2を付した引用に見られるように、ゾラは作品に影響を及ぼす制約が厳しい媒体を避け、それが比較的緩やかな文芸雑誌を選んで発表しており、それゆえ、初版を一見した限りでは、この版と雑誌版との差異が果たして媒体に起因するものなのか判断がつきにくいこと。そして媒体の問題は、作品の構成や文体に影響を与えやすい新聞連載も視野に入れた方が、相違点がより明確になること。また、『テレーズ・ラカン』の場合、この小説の初版発表後に巻き起こった批判から、それらに対して答える序文が付され、作品自体も更なる校正を施された第2版が決定版と見做されているが、この版には、初版に施した校正の殆どが引き継がれており、その校正の方針は初版からほぼ一貫しているように思われること。さらに、第2版に付された序文では、この小説の非道徳性に対する批判に答える形で科学性が強調されているが、批判によって、より鮮明になったこの主張の校正に対する影響の有無を調べることは、広く文体の問題を考えるためには有益であると思われるからである。

それゆえ、本論では、まずはこの小説自体の構成と、以前我々が検討した新聞に発表された連載小説『ルーゴン家の運命』と『ブラッサン征服』に見られた特徴から、『テレーズ・ラカン』における媒体の違いに起因する差異を探り、次いで、この小説の雑誌版と書籍版を照合することにより、版による文体と語彙の違いを明らかにしたい。

1. 『テレーズ・ラカン』の構成

『テレーズ・ラカン』は、この小説と同時期に書かれていた新聞連載小説『マルセイユの秘密』の62章には遠く及ばないものの、32章で構成されており、この小説よりもページ数の多い『ルーゴン=マッカール叢書』に収められた小説が一作平均17,6章³であることを考えると多い。しかしながら、先に挙げたウッセに宛てた手紙の中で、

Je désire pouvoir donner chaque fois de larges fragments. Je vous offre donc un roman en six parties, en six morceaux égaux chacun en étendue à mon étude sur Édouard Manet.⁴

とゾラ自身書いていることから、『テレーズ・ラカン』を均等な長さの6つの部分から構成される小説として構想していたことがわかる。実際、『芸術家』誌への掲載は3回（1から11章、12から20章、21章から最後まで）に分割されたのみで発表されたが、最近出版されたこの小説の文庫版の解説でも、アンリ・ミトランは、この小説を3部（カミーユの殺害と埋葬までの1章から13章。テレーズとロランの結婚までの14章から23章。そして24章から最後まで。）に分けて解説している⁵。一方、コレット・ベッケルは、この小説に関する論考の中で、クロード・ブレモンの論に言及しつつ、この小説が、欠乏状態から幸福の探求を志向し（テレーズの欲求不満とロランとの不倫関係の成立。1章から6章。）、補助者の助けを借りて障害を取り除き（テレーズとロラン、共謀してカミーユを殺害。7章から11章。）、欲求が充足されるが（テレーズ、ロランと再婚。12章から21章。）、新たな欠乏状態を招く（カミーユの亡霊にうなされるテレーズとロラン、耐えかねて自殺。22章から最後まで。）という物語のパターンを典型的に踏襲していることを指摘している⁶。つまり、たとえ32章で構成されているとしても、この物語には3乃至4つの展開があるのみである。ゆえに、章が変わるごとに物語の新たな展開を見せる、ある種の連載小説が醸し出すめまぐるしさは、この小説からは感じられない。

32章という構成は、雑誌版でも書籍版でも変わらないが、『テレーズ・

ラカン』においては、『ルーゴン家の運命』と『プlassen征服』にみられた数行から十数行に及ぶ削除に加え、雑誌版で5行以上、場合によっては10行以上からなる部分の移動が見られる。章をまたがるような大幅な移動や削除ではないため、物語の筋立てが変化することはないが、物語の時間の流れに関わるものはある。例えば雑誌版からの次の削除の例がある。

Depuis plusieurs mois ils étaient mariés, et depuis plusieurs mois ils passaient les nuits dans des cauchemars atroces et les jours dans des assoupissements réparateurs. (oct, 48)

という24章の終盤にある一節は、次に続く25章の出だし、「Au bout de quatre mois 4か月後 (oct, 49),(I, 215),(II, 222)」という時間と矛盾する印象を与えかねないがゆえに削除されたと考えられる。次のテレーズとロランの結婚式後の晩餐の場面にも、時間の流れに対する意識からの書き換えと思われるものがある。

雑誌版

Le repas fut d'une gaité médiocre. Les époux étaient *[sic]* graves, pensifs, ils avaient eu, pendant l'après-midi, une sorte de rire nerveux qui paraissait les avoir lassés et écoeurés ; placé à table en face l'un de l'autre, ils souriaient d'un air contraint et retombaient toujours dans une rêverie lourde. Ils éprouvaient depuis le matin des sensations étranges, d'une difficulté extrême à analyser, et dont ils cherchaient vainement à se rendre compte. [...] Puis, la longue promenade sur les boulevards les avait comme bercés et endormis [...] Quand ils étaient entrés dans le restaurant, une fatigue accablante pesait à leurs épaules, une stupeur croissante les envahissait. À table, ils mangeaient, ils répondaient, ils remuaient les membres comme des machines. (sept, 381)

初版

Le repas fut d'une gaité médiocre. Les époux étaient graves, pensifs ; ils avaient eu, pendant l'après-midi, une sorte de rire nerveux qui paraissait les avoir lassés et écoeurés ; placé à table en face l'un de l'autre, ils souriaient d'un air contraint et retombaient toujours dans une rêverie lourde.

Ils éprouvaient depuis le matin des sensations étranges, d'une difficulté extrême à analyser, et dont ils cherchaient vainement à se rendre compte. [...] Puis, la longue promenade sur les boulevards les avait comme bercés et endormis [...] Quand ils étaient entrés dans le restaurant, une fatigue accablante pesait à leur épaules, une stupeur croissante les envahissait.

À table, ils mangeaient, ils répondaient, ils remuaient les membres comme des machines. (I, 166)

第2版

Le repas fut d'une gaité médiocre. Les époux étaient graves, pensifs. Ils éprouvaient depuis le matin des sensations étranges, dont ils ne cherchaient pas eux-même à se rendre compte. [...] Puis, la longue promenade sur les boulevards les avait comme bercés et endormis [...] Quand ils étaient entrés dans le restaurant, une fatigue accablante pesait à leur épaules, une stupeur croissante les envahissait.

Placé à table en face l'un de l'autre, ils souriaient d'un air contraint et retombaient toujours dans une rêverie lourde ; ils mangeaient, ils répondaient, ils remuaient les membres comme des machines. (II, 173-174)

この場面では、フラッシュ・バックが使われているが、雑誌版と初版においては、レストランでの場面と回想部分が交互に現れている。初版では、レストランの場面とその日の午後の回想、再びレストランの場面とその日

の朝の回想という組み合わせをより明確にするかのように、雑誌版では一段落でまとめていたところを二つの段落に分けている。それに対して第2版では、二つ目の文の最初の部分 « Les époux était graves, pensifs 夫婦はまじめな面持ちで考え込んでいた »を残し、一つ目の回想 « ils avaient eu, pendant l'après-midi, une sorte de rire nerveux qui paraissait les avoir lassés et écœurés 彼らは午後の間中、いわばヒステリックに笑っていたが、それは彼らを疲れさせうんざりさせているかのように見えた »を削除し、「 placé à table テーブルにつき »から « dans une rêverie lourde 重々しい夢想の中で »を次の段落の冒頭に移動させることで、フラッシュ・バックの部分を短くかつひとまとめにして物語の進行を早めている。また、この移動と削除により、振り返る時間は、古いところから順に並べられている。

このような削除は、時間や物語の進行を時間軸に沿ったより自然な流れにするための修正であると思われるが、移動についても、この傾向にやや類似したものが認められる。例えば、テレーズとロランの結婚後に再開した木曜の集まりに対するテレーズの感情の変化がある。

雑誌版・初版

La jeune femme [=Thérèse] parla de mettre ces gens à la porte ; ils l'irritaient avec leurs éclats de rire bêtes, avec leurs réflexions sottes. Mais Laurent lui fit comprendre qu'un pareil congé serait une faute ; il fallait autant que possible que le présent ressemblait au passé ; il fallait surtout conserver l'amitié de la police, de ces imbéciles qui les protégeaient contre tout soupçon. Thérèse plia [...]

D'ailleurs, Thérèse elle-même finit par souhaiter ardemment les soirées du jeudi. [...] (oct, 43-44), (I, 205)

この一節の最初の段落において、木曜に家にやって来る人々に対するテレーズの激しい苛立ちは、ロランによって何とか抑えられるが、次の段落に

移るとすぐ、テレーズは突然この集まりを « *souhaiter ardemment* 待ちこがれる » ほどに急変する。これに対して第 2 版では、段落が変わった « *D'ailleurs* その上 » 以下に続く 11 行を、その 6 ページ先で再び木曜の集まりに言及する箇所へ移動させ、その代わりに、 « *Ce fut vers cette époque que la vie des époux se dédoublait en quelque sorte.* (II, 212) 夫婦の生活がいわば二分化したのはこの頃だった » という一文で次の段落につないでいる。この移動と加筆によって、雑誌版に見られたようなテレーズの感情の唐突な変化を避けていると言えよう。

実際、移動や削除は、物語の流れというよりも文体に影響を及ぼしているものの方が多いが、それは次章で検討する。

II. 『テレーズ・ラカン』の文体

1. 『ルーゴン家の運命』と『プlassen征服』との相違点と共通点

『ルーゴン家の運命』と『プlassen征服』については、すでに書籍版と新聞連載版の違いを我々は確認した⁷。その最も顕著な傾向は、前者についていうならば、段落をつなげて一段落を長くすること、後者については、名詞を修飾する形容詞が雑誌版では二つであったところを一つにする、もしくは直説法の動詞を使った文を二回続ける代わりに分詞構文に書き変えるなど、対称性を崩す傾向が認められた。そして、両作品に共通して見られる傾向は、接続詞 *et* の大量の削除である。これは、対称を成す表現を崩す例に加え、この接続詞によって繋がれていた文を切り、一文を短くする例が多く認められた。

これらの特徴のうち、段落の長さに関して言うならば、雑誌版と第 2 版との間の段落の数の増減はほぼ同数であるため、『テレーズ・ラカン』の雑誌版には、段落の長さに対する意識はほとんど感じられないと言ってよい。また、対称性の回避については、該当する箇所が 45 か所以上数えあげられるゆえに、これまで検討してきた小説同様、一見、その傾向は認められるようにも思われるが、反対に、対称を成すように書き変えている箇所も小説全体にわたって 15 か所程度認められる。このタイプの書き換え

は、とりわけ『ブラッサン征服』においてほとんど見られなかったことを考慮すると、『テレーズ・ラカン』では、対称性は、それほど回避されるべきこととは考えられていないと判断できる。

しかしながら、これらの作品と『テレーズ・ラカン』とに共通する傾向もある。それは接続詞 *et* の大量の削除と一文を短くすることである。まず接続詞 *et* は、雑誌版と比べ、第 2 版は 120 以上も少ない。ゾラの語彙について量的な側面から分析したエチエンヌ・ブリュネの研究⁸によると、『テレーズ・ラカン』において、*et* は、文法語の中では、*ils* に次いで頻繁に使用されている。この研究が『テレーズ・ラカン』の第 2 版以降の版を底本とする 1928 年に出版されたゾラ全集⁹を用いて分析していることと、最頻出の *ils* との大きな差を考慮するなら、雑誌版において、接続詞 *et* は *ils* に及ばないとはいえ、第 2 版よりもはるかに目立っていると言えよう。また、一文を短くする傾向、つまり、読点から句点あるいは接続詞から句点への変更は 50 箇所程度、内、*et* を句点に変更しているケースは 20 カ所程認められる。このことから、ゾラが、新聞や雑誌といった不特定多数の読者に向けた媒体に連続して発表する場合と単著の書籍で完結した形で発表する場合と区別する書き方が見えてくる。つまり、一文を短くする傾向は、書籍版の方に見られるのだが、それとともに、表現も簡潔にしている例がとりわけ後半部分に認められる。まずは、削除とジェロンディフの使用によって短くしている例を見てみよう。

雑誌版

Une rage sourde s'était emparée de Laurent. Il creva la toile d'un coup de poing et sortit de l'atelier, où la nuit commençait à tomber. Il songeait avec désespoir à son grand tableau ; maintenant il n'y fallait plus penser (oct, 54)

初版

Une rage sourde s'était emparée de Laurent. Il creva la toile d'un coup de poing et sortit de l'atelier, où la nuit commençait à tomber. Il songeait avec désespoir à son grand

tableau. Maintenant il n’y fallait plus penser (I, 225)

第 2 版

Une rage sourde s’était emparée de Laurent. Il creva la toile d’un coup de poing, en songeant avec désespoir à son grand tableau. Maintenant il n’y fallait plus penser (II, 232)

この引用において、初版は、雑誌版 3 行目の « son grand tableau 彼の描いた大きな絵 » の後のポワン・ヴィルギユルをポワンに換えることで、最後の文を短くしているだけだが、第 2 版では、最初の二つの版の 3 番目の文の動詞をジェロンディフにして 2 番目の文につないでいるとはいえ、2 番目の文の関係代名詞 où 以下の、特にこの文脈においては不可欠ではない場所や時間を表わす節が削除されるため、第 2 版ではより簡潔な一文に変わっている。さらに、初版で変更した点はそのまま保持し、この引用における文はすべてより短くかつ簡潔になっている。

また、削除のこれ以外の例で、異なる傾向が読み取れるものに以下の一節がある。

雑誌版

[...] il lui [=Mme Raquin] semblait qu’on l’étranglait, et quand elle voulut crier, appeler au secours, elle ne put balbutier que des sons rauques. Puis sa langue devint de pierre dans sa bouche et fut si lourde qu’elle ne put jamais plus la soulever. Ses chairs s’était roidies. La paralysie venait de la rendre muette et de frapper ses mains et ses pieds d’immobilité.

(oct, 55)

初版

[...] il lui [=Mme Raquin] semblait qu’on l’étranglait, et, quand elle voulut crier, appeler au secours, elle ne put balbutier que des sons rauques. Sa langue était devenue de pierre. Ses mains et ses pieds s’étaient roidis. Elle se trouvait frappée de

mutisme et d'immobilité. (I, 227)

第2版

[...] il lui [=Mme Raquin] semblait qu'on l'étranglait. Quand elle voulut crier, appeler au secours, elle ne put balbutier que des sons rauques. Sa langue était devenue de pierre. Ses mains et ses pieds s'étaient roidis. Elle se trouvait frappée de mutisme et d'immobilité. (II, 234)

まず第2版の一番目の文は、それ以前の版において対応する文中の *et* を削除して文を短くするという例だが、これに続く部分の削除と書き換えは興味深い。雑誌版では、「*sa langue devint de pierre* 彼女の舌は石になった」という状態の説明が続くのに対し、初版以降では「*pierre*」という語の持つ隠喩の力に任せている。さらにこれに続く文では、「*Ses chairs* 彼女の肉体」と全体が「*roidi* 硬直した」ことから始め、次いで、「*La paralysie* 麻痺」が及んだ部分を、口（「*muette* 啞」の状態）そして「*ses mains et ses pieds* 手足」と、部分を確認している。それに対して初版以降は、「*Ses chairs* 彼女の肉体」の代わりに「*Ses mains et ses pieds* 彼女の手足」を入れて体の各部位からはじめ、「*Elle se trouvait frappée de mutisme et d'immobilité*. 彼女は、口がきけず動けぬ状態に見舞われてしまった」というラカン夫人の身体全体の状態を説明している。どの版も、最後の部分はその前の部分の内容を、言葉を変えて繰り返しているが、雑誌版は、全体から部分へと言及するため、部分への言及がいれば繰り返しになり、部分から全体へと敷衍させた初版や第2版よりも冗長だと言えよう。このように、接続詞「*et*」や読点の句点への変更は、単に文を短くするだけでなく、冗長と思われる部分の削除あるいは書き換えをしばしば伴っている。

2. 論理性と簡潔さ

構成について述べた部分でも触れたように、『テレーズ・ラカン』にお

いて、削除や移動は、小説全体の構成よりも文体に影響を及ぼしている。より顕著に見られるのは、物語の進行をより直線的にする傾向である。例えば、一人でいることに一層強い不安を覚えるようになったテレーズの行動を描く次の一節が挙げられる。

雑誌版

Elle [=Thérèse] était désœuvrée, lorsqu'elle ne pleurait pas aux pieds de Mme Raquin ou qu'elle n'était pas battue et injuriée par son mari. Elle finit par prier Suzanne de venir passer les journées entières avec elle, espérant que la présence de cette pauvre créature, douce et pâle, la calmerait. Dès qu'elle se trouvait seule dans la boutique, un accablement la prenait, elle regardait d'un air hébété les gens qui traversaient la galerie sale et noire, elle devenait triste à mourir au fond de ce caveau sombre puant le cimetière.

Suzanne accepta son offre avec joie [...] (oct, 80)

雑誌版では、1.テレーズ、ラカン夫人に懺悔したり、夫と口論していないと手持ち無沙汰になる。2.スザンヌを呼ぶ。3.一人でいる時の寂しい状況。4.スザンヌ、テレーズの頼みを喜んで引き受ける、という順で語られるが、初版と第2版では、引用中の下線部をこの段落の最後に移動することにより、2.と3. が入れ替わり、3.から4.へとよりスムーズに移行させている。

(参照：I, 275-276；II, 280) このような例は、例えば22章の冒頭にも認められるように思われるが、それよりも数多く見られるのが、同じ内容を削除する傾向である。例えば下の引用のような例が挙げられる。

雑誌版

De là venaient toute leur colère et toute la haine qui les séparait. Ils comprenaient que le mal était incurable, qu'ils souffriraient jusqu'à leur mort du meurtre de Camille, et cette idée de

perpétuité dans la souffrance les exaspérait. Ils se brûlaient et se tenaillaient mutuellement, et ne sachant sur qui frapper, il s'en prenaient à eux-mêmes, ils s'exécraient, s'accusaient, se soulageaient en s'injuriant. (oct, 66-67)

初版

De là venaient toute leur colère et toute leur haine. Ils comprenaient que le mal était incurable, qu'ils souffriraient jusqu'à leur mort du meurtre de Camille, et cette idée de perpétuité dans la souffrance les exaspérait. Ne sachant sur qui frapper, il s'en prenaient à eux-mêmes, ils s'exécraient, s'accusaient, échangeaient des injures et des coups. (I, 250)

第2版

De là venaient toute leur colère et toute leur haine. Ils sentaient que le mal était incurable, qu'ils souffriraient jusqu'à leur mort du meurtre de Camille, et cette idée de perpétuité dans la souffrance les exaspérait. Ne sachant sur qui frapper, il s'en prenaient à eux-mêmes, ils s'exécraient. (II, 255)

まず、雑誌版における「*toute la haine* 憎しみ」を補足説明する関係代名詞「*qui*」以下を削除して冠詞「*la*」を所有形容詞「*leur*」に変えることにより、初版と第2版では、「*colère* 怒り」と「*haine*」とが等位な関係になり、「*toute leur...*」という強調の表現が反復されることで、この二語に置かれる強勢はさらに強化される。さらに雑誌版の「*il s'en prenaient à eux-mêmes* 彼らのはつかみ合いのけんかをしていた」とほぼ同意の「*Ils se brûlaient et se tenaillaient mutuellement* 彼らは傷つけあい、苦しめあった」を削除、さらに第2版では「*s'accusaient*」以下も削除されている。このように、補足説明や同意の表現を削除することで、書籍版のこの箇所は、雑誌版と比べ、より簡潔にまとめられている。

同じ内容を削除する傾向は、18章のカミーユ殺害後のテレーズとロランが陥った状況を描いた場面にも認められる。この場面では、この二人の人

物が鎖で繋がれたように一人で自由に行動することができない様子が描かれた(sept, 369 ; I, 142, II,150)後、雑誌版と初版ではこの描写に続いていた次の段落全体が、第2版では削除される。

Ils voulurent ne plus tarder et s'épouser aveuglément, espérant calmer ainsi les brûlures qui les dévoraient. Ils sentirent qu'ils étaient liés, qu'ils ne pouvaient échapper à ce mariage de sang qui leur donnait une même chair et un même cœur. D'ailleurs, ce fut avec un vague désespoir qu'ils prirent la résolution suprême de s'unir ouvertement. Tout au fond d'eux, il y avait de l'effroi [la crainte]. Leurs désirs frissonnaient. Ils étaient penchés l'un sur l'autre comme sur un gouffre dont l'horreur les attirait ; ils se courbaient mutuellement au-dessus de leur être, cramponnés, muets, les yeux fixes et hagards, et un vertige, d'une volupté cuisante, alanguissait leurs membres, leur donnait la folie de la chute. C'est en criant de jouissance et d'anxiété qu'ils s'abandonnaient, qu'ils tombaient, pour ainsi dire, l'un dans l'autre, se mêlant et ne faisant qu'une seule chair, meurtrie et déjà saignante, apprêtée pour d'atroces souffrances.
(sept, 370 ; I, 142-143. 尚、角括弧内の語は、初版における雑誌版からの書き換え)

この長い段落では、この直前の段落での二人が鎖で繋がれているような状態を、「s'épouser 結婚する」、「liés 結び付けられた」、「mariage 結婚」、「penchés l'un sur l'autre お互いに靠れあう」、「se courbaient mutuellement お互いに服従しあう」、「se mêlant et ne faisant qu'une seule chair 混じり合い、一つの肉体でしかならなくなり」と、言葉を変えて繰り返している。また、引用中の下線部は、前出のブリュネの研究で頻出語彙としてリストに挙げられている語であるが¹⁰、ここでは頻出語彙が数多く使われていることが分かる。また、リストには入っていないとはい

え、「calmer」や「meurtrie」は、その派生の関係にある「calme」や「meurtrier」「meurtre」は挙げられているので、一層この段落で使われている語句の既視感は強いと言えるだろう。初版において、「effroi 恐れ」を「crainte 不安」に書き換えているのは、ゾラ自身頻出語を多用していることを意識していたことが読み取れよう。これらの点を考慮すると、ゾラが、内容的な重複と多用している語を避けて冗長さを解消するために、この段落全体を削除したことが考えられる。

単なる削除ではなく、数行に渡るくだりがごく短い一文に書き換えられる場合もある。例えば、31章に、テレーズとロランが、お互いに相手が警察に出頭するのではないかという疑いを持ち、監視しあう一節がある。

雑誌版・初版

À plus de vingt reprises, ils allèrent jusqu'à la porte du commissariat de police, l'un suivant l'autre. [...] Et ils se rejouignaient toujours dans la rue, ils se décidaient {toujours} à attendre encore, après avoir échangé des insultes et des prières ardentes. La même scène se renouvelait sans cesse, plus douloureuse et plus ignoble chaque fois. Les meurtriers en étaient continuellement à un état de crise aiguë ; ils se haïssaient, ils se redoutaient, ils tournaient furieusement dans une méfiance et une peur mutuelles qu'ils cherchaient vainement à cacher sous des injures et des menaces. Chacun d'eux savait parfaitement que jamais il ne se livrait, mais chacun d'eux tremblait que l'autre n'eût ce courage suprême.

Après chaque querelle, ils restaient soupçonneux et farouches[arouche *[sic]*]. (oct, 91 ; I, 296. 尚、波括弧内は初版で加筆された語。角括弧内は初版での形)

この引用の4行目「La même scène se renouvelait sans cesse 同じ原因のけんかが絶えず繰り返された」以下は、最初の3行と内容的には変わら

ず、その様子を具体的に説明しただけである。そして第2版で、この部分は、雑誌版の最後の文を変化させた単純な一文 « *Chaque nouvelle crise les laissait plus soupçonneux et plus farouches.* 動揺に見舞われるごとに、彼らはより疑い深く、執拗になっていった(II, 300) »に書き直される。

このように、移動や削除により、時間の流れの逆行や物語の進行のぶれは修正され、使用頻度の高い語や同じ内容の反復は避けられ、第2版の文章は、全体的に、より論理的で簡潔になっている。

III. 語彙の選択

『テレーズ・ラカン』の雑誌版と書籍版の語彙の異同に関しては、比較的強い二つの傾向が挙げられる。まず、雑誌版において、avoir や vouloir といった基本動詞を使った平易な表現が頻出しているのに対し、書籍版、とりわけ第2版ではそれらの言語レベルをより向上させるか、より詳述あるいは的を絞った表現にしていること、そして同語の反復を避ける傾向である。ここではこの二点についてより詳しく検討してみる。

1. 同語反復の回避

同じ語を繰り返すことを忌み嫌う作家としては、フロベールが有名であるが、この小説の雑誌版から第2版への書き換えを検討すると、ゾラも師と仰ぐこの作家に近い傾向があることが分かる。例えば、ロランがカミーユを殺害後、人を呼びに行く際に感じたことを描写した次の一節がある。

雑誌版

Il [=Laurent] était presque certain de l'impunité, et une joie sauvage, la joie du crime accompli, l'emplissait. [...]

Il trouva l'ancien commissaire de police à table, avec Olivier et Suzanne. [...] puis la douleur de cette mère lui était lourde, bien qu'il s'en souciât médiocrement au fond.

Lorsque Michaud le vit entrer avec des vêtements grossiers
[...] (sept, 347)

初版

Il [=Laurent] était presque certain de l'impunité, et une joie sauvage, la joie du crime accompli, l'emplissait. [...]

Il trouva l'ancien commissaire de police à table, en compagnie d'Olivier et de Suzanne. [...] puis la douleur de cette mère lui était lourde, bien qu'il s'en souciât médiocrement au fond.

Lorsque Michaud le vit entrer vêtu de vêtements grossiers
[...] (I, 94)

第 2 版

Il [=Laurent] était presque certain de l'impunité. Une joie lourde et anxieuse, la joie du crime accompli, l'emplissait. [...]

Il trouva l'ancien commissaire de police à table, en compagnie d'Olivier et de Suzanne. [...] puis la douleur de cette mère lui était pesante, bien qu'il s'en souciât médiocrement au fond.

Lorsque Michaud le vit entrer vêtu de vêtements grossiers
[...] (II, 103)

雑誌版の 3 行目と最終行の « avec » という使用域の広い語は、初版と第 2 版では、それぞれ « en compagnie d[e]... ...を伴って » と « vêtu de... ...を着て » に書き換えられることで、反復を避けるのみならず、それぞれの文脈により適した表現に換えられている。さらに、雑誌版一行目のロランの « une joie sauvage 野蛮な喜び » は、初版では変わらぬものの、第 2 版になると、まだカミーユ殺害の疑いが自分に掛けられることを恐れているこの時のロランの « Une joie lourde et anxieuse 重々しく不安な喜び » に書き換えられるが、これにより雑誌版と初版の 4 行目にあたる « lourde » が反復されるため、第 2 版ではこの語を « pesante 重[かった] » と書き直して

いる。このようなパターンの書き換えは、カミーユ殺害後、テレーズとロランが結婚する必要をお互いにますます感じるようになる次の一節にも認められる。

雑誌版

Maintenant, ils voulaient leur union de tout le désir qu'ils avaient de chasser leur effroi, de dormir un sommeil calme.[...] ils éprouvaient l'impérieuse nécessité de rêver un avenir de félicités amoureuses et de jouissances paisibles. [...]

Thérèse voulait uniquement se marier parce qu'elle avait peur et que son organisme réclamait les caresses violentes de Laurent. [...]

Laurent, d'un tempérament plus épais, tout en cédant à ses terreurs et à ses désirs, voulait raisonner sa décision.

[...] D'ailleurs, il entendait ne pas travailler toute sa vie.

(sept, 371-372)

初版

Maintenant, ils voulaient leur union de tout le désir qu'ils éprouvaient de dormir un someil calme. [...] ils sentaient l'impérieuse nécessité de s'aveugler, de rêver un avenir de félicités amoureuses et de jouissances paisibles. [...]

Thérèse voulait uniquement se marier parce qu'elle avait peur et que son organisme réclamait les caresses violentes de Laurent. [...]

Laurent, d'un tempérament plus épais, tout en cédant à ses terreurs et à ses désirs, voulait raisonner sa décision.

[...] D'ailleurs, il entendait ne pas travailler toute sa vie.

(I, 146-147)

第2版

C'est ainsi qu'ils voulaient leur union de tout le désir qu'ils

éprouvaient de dormir un sommeil calme. [...] ils sentaient l'impérieuse nécessité de s'aveugler, de rêver un avenir de félicités amoureuses et de jouissances paisibles. [...]

Thérèse désirait uniquement se marier parce qu'elle avait peur et que son organisme réclamait les caresses violentes de Laurent. [...]

Laurent, d'un tempérament plus épais, tout en cédant à ses terreurs et à ses désirs, entendait raisonner sa décision.

[...]D'ailleurs, il comptait ne pas travailler toute sa vie.

(II, 153-155)

まず雑誌版 2 行目の « ils éprouvaient 彼らは感情を抱いていた » が、初版以降、ほぼ同意の « ils sentaient 彼らは感じていた » に書き換えられたのは、この一節を含む段落の始まりが « éprouver » を含む文に書き換えられたため、この動詞の繰り返しを避けるためだと考えられるだろう。さらに、雑誌版と初版の 4 行目と 7 行目の vouloir が、第 2 版ではそれぞれ « désirait ...したかった » と « entendait 聞き入れた » に書き換えられることで、同じ動詞の繰り返しが避けられている。そして、雑誌版の最後の行の « il entendait » が « il comptait » に書き換えられたのも、やはり 8 行目の « voulait » を « entendait » に書き換えたため、この語の繰り返しを避けたと考えられる。このように、あたかもビリヤードのように、一つの語の書き換えが、次々に書き換えを促している様子が窺えよう。こういった書き換えの例は『テレーズ・ラカン』全体を通して他にも多々認められるゆえ¹¹、まさに、同語反復を極度に恐れるフロベールの書き換えの習性と同種のものをゾラの作法にも窺うことができると言える。

2. 言語レベルの向上

先の書き換えの例でも触れた通り、『テレーズ・ラカン』の書籍版では、ゾラが文語的な表現へと書き直していると思われる例も認められる。ただ、

これは一貫しているわけではなく、より露骨な語への書き換えやより卑近な言葉への書き換えという例外も認められるのだが、これらの例外については次の章で検討する。

まずは、より文語的と見做されている語への書き換えとして、例えば、以下の例が挙げられる。

métier (août, 178) → profession (I, 34), (II, 44)

autrefois(sept, 365) → jadis (I, 133), (II, 141)

Elle était là (oct, 55), (I, 228) → Elle gisait (II, 235)

Tout à tour (oct, 71) → Successivement (I, 259), (II, 264)

leur querelle (oct, 71), (I, 259) → le procès qu'il faisaient (II, 264)

また、「avoir」「dire」「parler」などの基本的な語や汎用性の高い語を使った表現や中立的な語や表現をよりコンテキストに適合した表現に書き直す傾向については、以下の例が挙げられる。

[...] elle [...] s'oubliait à regarder travailler Laurent. (août, 180)

→ [...] elle [...] s'oubliait à regarder peindre Laurent.

(I, 40), (II, 50)

Puis il aperçut le bout d'épaule et il se baissa [...] pour y appuyer ses lèvres.

(oct, 27)

→ Puis il aperçut le bout d'épaule, et il se baissa [...] pour coller ses lèvres à ce morceau de peau nue. (I, 171), (II, 179)

N'ayant d'ailleurs pas conscience des paroles qu'ils disaient

(oct, 29), (I, 176)

→ N'ayant d'ailleurs pas conscience des paroles qu'ils prononçaient (II, 184)

[...] par crainte de parler tout à coup de Camille sans le vouloir.

(oct, 30), (I, 178)

→ [...] par crainte de nommer tout à coup de Camille sans le vouloir. (II, 185)

[...] il se disait qu'il ne pouvait allonger la main sans rencontrer Camille. (oct, 39)

→ [...] il se disait qu'il ne pouvait allonger la main sans saisir une poignée de la chair molle de Camille. (I, 195), (II, 202)

Il fut donc décidé [...] qu'il aurait cent francs par mois (oct, 50)

→ Il fut donc décidé [...] qu'il toucherait cent francs par mois (I, 217), (II, 224)

Il vaut mieux laisser aller les choses (oct, 63)

→ Il vaut mieux laisser aller les événements (I, 242), (II, 248)

Il se disait que le chat [...] le dénoncerait peut-être un jour (oct, 84), (I, 283)

→ Il se disait que le chat [...] le dénoncerait si jamais il parlait un jour (II, 287)

depuis quelque temps (oct, 92) → depuis quinze à vingt jours (I, 298), (II, 302)

この傾向にあてはまるのはここに挙げた例がすべてではないが、汎用性の高い基本動詞を使った表現から、さらに的を絞った表現への書き換えは、初版刊行時に主としてなされていることが分かる。このことから、ゾラが、より文学的に豊かな表現を発揮できる媒体として書籍を考えていたことが窺えよう。ただ、こういった傾向とは逆方向の書き換えの例も認められる。

lorsque (sept, 364), (I, 131), → quand (II, 139)

À plusieurs reprises (oct, 42)

→ À plusieurs fois (I, 201), (II, 208)

besogne (oct, 58), (I, 232) → chose (II, 239)

assassinat (oct, 60) → crime (I, 237), (II, 244)

このような例から、言語レベルを上げる、もしくは基本的な動詞を使った日常的な表現からよりコンテキストに適した文章表現への書き換えは、『テレーズ・ラカン』全体に及んで一貫しているとは言えないが、それでも優勢であるとは言えるだろう。

また、副詞の位置の変更も注目に値する。副詞の位置は、慣例的な用法が多く、厳格に定められない場合が多いが、文中の動詞が一つの場合は動詞の後に、助動詞と動詞による組み合わせの場合は、その間に入れるという原則は、当時の文法書に共通して書かれている¹²。それゆえに、文全体の意味に影響を及ぼすために、文の外に出す必要がある場合を除いて¹³、ゾラも当時の一般的な見解に従うかのように、この二つの原則に適う位置に副詞の位置を移動させている。

Chaque objet [...] était pendu lamentablement à un crochet en fil de fer. (août, 165), (I, 4)

Chaque objet [...] était lamentablement pendu à un crochet de fil de fer. (II, 14)

Mme Raquin ouvrit la porte doucement (août, 187), (I, 53)

Mme Raquin ouvrit doucement la porte (II, 63)

Un frisson d'effroi avait secoué brusquement sa chair (sept, 371)

Un frisson d'effroi avait brusquement secoué sa chair (I, 144)

Un frisson d'effroi avait brusquement secoué ses membres (II, 152)

[...] les invités, bien reçus, virent s'étendre avec béatitude une longue suite de soirées tièdes devant eux. (oct, 44)

[...] les invités, bien reçus, virent avec béatitude s'étendre une longue suite de soirées tièdes devant eux. (I, 205), (II, 212)

これらの例を見ると、助動詞と動詞の間に置くという副詞の位置については、初版では、テキストの中ごろから修正されはじめ、第 2 版になって、この規則が全体的に適用されていることが分かる。

以上の点を観ると、雑誌版から、初版、第 2 版へと修正が進むにつれ、

当時の文章語の規範に適うよう書き換えられながらも、表現もより多様になっていると言えよう。

3. 加筆の傾向

反復や冗長さを避けるために削除された部分には、人物の行動の些末的な描写が少なくないが、書籍版には、あえて些末的な事項を加筆している箇所がある。それらは人物の何気ない動作を描写するものであるが、これらの加筆によって生み出される効果もある。

例えば、12章において、ロランがラカン夫人にカミーユの死を告げようとするところをミショーに止められたおかげで、通りを行き来しながら徐々に落ち着きを取り戻しつつある描写の後で、以下の一文が加筆される。

Il n'avait pas mangé depuis le matin ; la faim le prit, il entra chez un pâtissier et se bourra de gâteaux. (I, 96), (II, 105)

自分が犯人であることを悟られずにカミーユの死を告げなければならないという状況にあって、高ぶっていたロランの神経が静まってゆく様子が、空腹という身体的欲求と結びつけられることで、前の段落で描写された状態よりもさらに落ち着いたことが示される。同時に、菓子を貪り食うというこの一文は、次の段落のミショーがラカン夫人に不幸を告げるという場面と対照的で、この場面をより際立たせていると言えよう。

食べるという行為の描写が劇的な効果を生むことは、11章の結末からも窺える。カミーユの殺害を語ったこの章は、第2版において、最後にこの一文が加えられる。

Ce furent les canotiers qui mangèrent le dîner de Camille. (I, 96), (II, 102)

事件に関わりのないボート遊びをする人々が夕食を取るという行為そのものは凡庸であるが、ここでは、彼らが食すのがおぼれたカミーユの分

あるため、その行為は死者に対する冒瀆ですらある。このように、日常生活の一場面の描写にすぎないものが、この小説においては、殺人のドラマを引き立てる役割を担っている。

また、この加筆の例と章の最後の文が削除されている例とを比べると興味深い。6、13、27章のそれぞれを結んでいた次の文は、第2版に到るまでにすべて削除される。

Laurent ne s'était pas trompé. Au premier baiser, Thérèse venait de tomber dans ses bras. (août, 182)

Il [=Laurent] regarda le passé comme mort, il attendit l'avenir. (sept, 355), (I, 111)

Laurent avait eu raison. Les Michaud et Grivet étaient des bêtes comme des oies, et l'impotente ne pouvait rien contre les assassins de son fils. (oct, 66)

11章の加筆された結末が行為の描写であるのに対し、これらの3例はすべて語り手が人物の行為を解説したものである。すなわちゾラは、それぞれの章の最後にできるだけ語り手を介入させずに、登場人物の行為の描写にとどめている。物語の緊張の高まりや劇的な場面は、解説的な言説ではなく、それらとは対照的な人物の何気ない行為や些末的なものごとの描写によって際立たされるのである。

人物の行動の詳述がその場면을強調することは、この小説の最終部でのテレーズとロランの心中場面にも認められる。

雑誌版

Et brusquement Thérèse et Laurent éclatèrent en sanglots. Ils venaient de descendre au fond de leur infamie ; ils s'étaient révélés l'un à l'autre, par l'expression de leur face ignoble d'assassin, la vie de boue et de sang qu'ils avaient menée et qu'ils mèneraient encore, s'ils étaient assez lâche pour vivre. Ils

éprouvèrent un besoin immense de repos, de néant. (oct, 95)

初版

Et brusquement Thérèse et Laurent éclatèrent en sanglots. Ils descendaient au fond de leur infamie, en se criant brutalement l'un à l'autre, par l'expression de leur face d'assassin, la vie de boue et de sang qu'ils avaient menée et qu'ils mèneraient encore, s'ils étaient assez lâche pour vivre. Ils se sentirent las et écœurés d'eux-même. Ils éprouvèrent un besoin immense de repos, de néant. (I, 304-305)

第2版

Et brusquement Thérèse et Laurent éclatèrent en sanglots. Une crise suprême les brisa, les jeta dans les bras l'un de l'autre, faibles comme des enfants. Il leur sembla que quelque chose de doux et d'attendri s'éveillait dans leur poitrine. Ils pleurèrent, sans parler, songeant à la vie de boue qu'ils avaient menée et qu'ils mèneraient encore, s'ils étaient assez lâche pour vivre. Alors, au souvenir du passé, ils se sentirent tellement las et écœurés d'eux-mêmes, qu'ils éprouvèrent un besoin immense de repos, de néant. Ils échangèrent un dernier regard, un regard de remerciement, en face du couteau et du verre de poison. (II, 308-309)

雑誌版では、この場面におけるテレーズとロランの行動はすすり泣くだけで、初版においても、わずかにお互いに罵り合うことがつけ加えられるのみである。それに対して第2版では、まずはすすり泣きをはじめ、次にお互いの腕の中に飛び込んで泣き続け、最後にお互いに目配せする。そして最後に、お互いに死をもたらす道具「couteau ナイフ」と「un verre de poison 毒入りのグラス」が提示される。また、それまでの二人の憎しみ合う関係の描写と大差ない初版における罵り合いとは異なり、第2版においては、疲れ果てた二人心情が変化し、その起伏も、「Une crise suprême les

brisa 激しい感情の高まりで疲労困憊させられる」、*« quelque chose de doux et d'attendri s'éveillait なにか優しくほろりとさせる気分が目覚める »*、*« ils se sentirent tellement las et écœurés d'eux-mêmes, qu'ils éprouvèrent un besoin immense de repos, de néant. あまりも疲れ、自分自身にうんざりし、休息と虚無感がかなり必要だと感じる »*、*« un regard de remerciement 謝意を込めた目配せ »*と、より詳らかに語られていることも注目しておこう。このように登場人物の行為を描写し、さらにそれまでのこの二人の関係性を多少変化させることによって、二人の死という結末の場面は一層際立たされている。第2版では、全体的に冗長な部分は削除され、簡潔な表現に書き換えられているだけに一層、二人の行為の詳述は、強調の効果を高めることになっている。

ところで、場を際立たせるのは、詳細な描写ばかりではない。この小説のテーマと結びつく性愛や恐怖心がとりわけ顕著に描かれる場面では、より露骨あるいは官能的な表現を厭わず、同語反復も忌避されていない。例えば、テレーズと関係を持つことによって新たに芽生えたロランの官能を描写する場面が挙げられる。

雑誌版

Thérèse avait fait pousser dans ce grand corps, gras et mou, un système nerveux d'une sensibilité étonnante. (oct, 36)

初版・第2版

À peine, au fond de sa chair alourdie, sentait-il parfois des chatouillements. C'étaient ces chatouillements que Thérèse avait développés en horribles secousses. Elle avait fait pousser dans ce grand corps, gras et mou, un système nerveux d'une sensibilité étonnante. (I, 188), (II, 196)

ロランの中で発達してゆく*« un système nerveux d'une sensibilité étonnante 驚くべき感覚の神経システム »*という雑誌版の出だしは、初版以降、*« chatouillements むずがゆさ »*という感覚とそれがテレーズによつ

て「en horribles secousses 恐ろしい振動」に変えられるという感覚によって説明する文に先行される。また、この感覚への共感を求めるかのよう
に「chatouillements」という言葉は繰り返される。

同様の傾向は、23章のテレーズとロランが共にする床に現れたカミーユの亡霊を描いた場面にも認められる。

雑誌版

[...] ils se prirent dans un embrassement horrible. La douleur et l'épouvante leur tinrent lieu d'amour. Ils crurent qu'ils étaient tombés tous deux sur un brasier. Ils poussèrent un cri et se pressèrent davantage, afin de ne pas laisser entre eux de place pour le noyé.

[...] elle éprouvait une volupté désespérée à poser sa bouche là où s'étaient enfoncées les dents de Camille. Un instant, elle eut la pensée de mordre son mari à cet endroit, de faire une nouvelle blessure, plus profonde, qui emporterait les marques de l'ancienne. Et elle pensait qu'elle ne pâlerait plus alors en voyant l'empreinte de ses propres dents. Ils luttèrent ainsi, se débattant dans l'horreur de leurs caresses. [...]

[...]

Brulés et meurtris, ils s'éloignèrent et se mirent à sangloter.

Et, dans leur sanglots, il leur sembla entendre les rires de triomphe du noyé. Ils n'avaient pu le chasser ; ils étaient vaincus. Camille revint doucement se coucher entre eux, tandis qu'ils pleuraient leur misère. (oct, 41-42)

初版

[...] ils se serrèrent dans un embrassement horrible. La douleur et l'épouvante leur tinrent lieu de désirs. Quand leurs membres se touchèrent, ils crurent qu'ils étaient tombés sur un brasier. Ils poussèrent un cri et se pressèrent davantage, afin de ne pas

laisser entre leur chair de place pour le noyé. Et ils sentaient toujours des lambeaux de Camille, qui s'écrasait ignoblement entre eux, glaçant leur peau par endroits, tandis que le reste de leur corps brûlait.

[...] elle éprouvait une volupté acre à poser sa bouche sur cette peau où s'étaient enfoncées les dents de Camille. Un instant, elle eut la pensée de mordre son mari à cet endroit, d'arracher un large morceau de chair, de faire une nouvelle blessure, plus profonde, qui emporterait les marques de l'ancienne. Et elle se disait qu'elle ne pâlirait plus alors en voyant l'empreinte de ses propres dents. Mais Laurent défendait son cou contre ses baisers ; il éprouvait des cuissons trop dévorantes, il la repoussait chaque fois qu'elle allongeait les lèvres. Ils luttèrent ainsi, râlant, se débattant dans l'horreur de leurs caresses.

[...]

Rejetés aux deux bords de la couche, brûlés et meurtris, ils se mirent à sangloter.

Et, dans leur sanglots, il leur sembla entendre les rires de triomphe du noyé. Ils n'avaient pu le chasser du lit ; ils étaient vaincus. Camille revint doucement se coucher entre eux, tandis qu'ils pleuraient leur impuissance. (I, 199-201)

第2版（下に示す最後の段落以外は初版と同じ。）

Et, dans leur sanglots, il leur sembla entendre les rires de triomphe du noyé, qui se glissait de nouveau sous le drap avec des ricanements. Ils n'avaient pu le chasser du lit ; ils étaient vaincus. Camille s'étendit doucement entre eux, tandis que Laurent pleurait son impuissance et que Thérèse tremblait qu'il ne prît au cadavre la fantaisie de profiter de sa victoire pour la serrer à son tour entre ses bras pourris, en maître légitime.

(II, 206-208)

この引用の二番目の文で、雑誌版の« amour 愛 »が初版から« désirs 欲望 »という、露骨に性愛を指す言葉に変えられていることをはじめ、この部分の雑誌版から書籍版への書き換えは、「entre eux 彼らの間」から« entre leur chair 彼らの肉体の間 »へ、「là そこ」から« sur cette peau この皮膚の上 »へと、身体を使った表現に書き換えられている。同様に、この長い一節に加筆された部分、「Quand leurs membres se touchèrent 彼らの手足が触れ合うと」、「d'arracher un large morceau de chair 大きな肉片を引きちぎる」、「Mais Laurent défendait son cou contre ses baisers ; il éprouvait des cuissons trop dévorantes, il la repoussait chaque fois qu'elle allongeait les lèvres. しかしロランは、彼女が自分の首に口づけようとするのをさえぎった。彼は身を焼くようなあまりにも激しいうずきを感じ、彼女が唇を突き出してくる度に押しつけたのだった。」にも、やはり同じく二人の身体的状態の描写が中心となる。また、「ils s'éloignèrent 彼らは離れた」から« Rejetés aux deux bords de la couche 寝床の両端に投げ出され »への書き換えや« qui se glissait de nouveau sous le drap avec des ricanements シーツの中ににやにや笑いながら再び滑り込んでくる »や、「du lit ベッドから」という加筆は、テレーズとロランがカミーユの亡霊に触れずして愛し合うことができないもどかしくも恐ろしい様子を描くのみならず、このベッドに取り囲まれているかのような状況は、18章で描かれた二人が鎖で繋がれたような状態を、表現を変えて繰り返しているとも言えよう。そしてこの引用の最後が、第2版において大幅に書き換えられたことにより、この状況のテレーズとロランの心理的状态がより詳細に語られるが、ここでもやはり、「qu'il ne prit au cadavre la fantaisie de profiter de sa victoire pour la serrer à son tour entre ses bras pourris, en maître légitime. その死体は、勝利を収めたことに乗じて、今度は正統な主人として、腐った腕で自分を抱きしめに来るんじゃないかと思って」という感覚的な恐怖が加えられている。

このように、初版以降、身体的、生理的あるいは感覚的な語彙や表現が多く加えられる¹⁴。この時我々は、第2版に付された序文で« j'ai montré les troubles profonds d'une nature sanguine au contact d'une nature

nerveuse.¹⁵ 神経症の気質に触れることで多血質の気質内に引き起こされた激しい不安」を書くというこの小説の科学性の主張を思い出すだろう。この有名な序文は、『テレーズ・ラカン』の初版発表後に激化した、この小説に対する非難に対して弁明する必要からつけられたものとされているが、身体表現や生理的な反応の描写の大部分が、すでに初版の時点で書き換えあるいは加筆されている事実を確認するとき、この序文で主張されている科学性は、非難されたことで急遽設えた弁明ではないことが分かる。とりわけこの序文において、科学的な小説という主張が全面に押し出されているあまり、あたかもゾラは、第2版においてはじめて科学性を強調する書き方に変えたようにとらえられる恐れがあるが、この方向性がより鮮明になったのは、遅くとも初版出版の準備段階であることを確認しておこう。

この点に加えて、ブリュネの研究を再び参照すると興味深い点が浮かび上がる。この研究によると、この小説の頻出形容詞の上位5位は「impotent 身体不随の」、「paralytique 麻痺した」、「noyé 溺れた」、「sinistre 陰鬱な」、「ignoble ひどい、卑劣な」で、不吉さや硬直感を表わす言葉が支配的であるのに対し、頻出動詞の上位5位は「frissonner 震える」、「roidir 硬直する」、「éprouver 感じる」、「repentir 後悔する」、「traîner 引きずる」と、感覚的な語彙がやや優勢である。また実詞の上位5位は「meurtrier 殺人者」、「mercier 手芸材料店」、「nerf 神経」、「morgue 死体公示所」、「meurtre 殺害」と殺人に関する語が3語もあり、さらに、7番目には「assassinat 殺害」14番目には「cadavre 死体」が挙げられている。つまり、この小説の語彙は、ラカン夫人の営む手芸材料店やその後夫人が患う硬直した身体が象徴する陰鬱で停滞した雰囲気と殺人のドラマの激しさにほぼ二分される。この二つの傾向が文体的傾向にも対応するように思われる。つまり、書き換えや削除によって物語を無駄のない押さえた表現で進めながらも、テレーズとロランの出会いやカミーユの殺害、そして亡霊の出現といった劇的な場面においては反復や露骨な語彙を厭わず使って強調することで、静と動の対照を際立たせているのである。

おわりに

『テレーズ・ラカン』は、当初から、新聞連載のように何十回にも分けられて発表されることが想定されていなかったゆえに、我々がすでに検討してきた『ルーゴン家の運命』から窺えた区切りに対する意識や『プlassen征服』にみられた連載向けの文体を取った形跡は、これらの作品ほど顕著にはみられない。しかしながら、雑誌は、書籍よりも不特定でより広い読者に向けられた媒体であることには変わりはない。雑誌版において、より平易な表現が好まれて使われていたのは、この小説を発表した当時のゾラの若さやこの作家が新聞や雑誌に対してはぞんざいな仕事をし、書籍の発表の際に初めて本腰を入れたというような理由は成り立たないだろう。すでにこの当時には、ジャーナリストとしての地位を築きあげつつあり、ジャーナリズムの性質をよく理解していたがゆえに、より広い読者層に向けて書く場合と文学愛好家に向けて書く場合とで書き方を多少なりとも変えていたと考えるのが妥当であろう。

我々はまた、これまで検討してきた「ルーゴン＝マッカール叢書」の二作品と『テレーズ・ラカン』との間に、簡潔さという文体的な特徴が書籍版の方に認められるという共通点を導き出した。この時、我々は、美しいフランス語の特徴として簡潔さを挙げた古典主義の原則を思い出すだろう。ゾラは古典主義の系譜に連なる作家とは言い難いが、古典主義的な美文の伝統は念頭にあったと言えるのではないだろうか。そしてこの簡潔さと連載が求める読みやすさとは必ずしも関連しないのだ。より広い読者に向けられた媒体での発表は、読者の興味を引き続けることが肝要である。そのための文体とは、簡潔にまとめられた短い文で書き進めるものではなく、平易な表現で「et それから」を連続させて一文また一文と読者をけん引する文体であったと言えよう。

註

本論で参照する『テレーズ・ラカン』のそれぞれの版は以下の通りである。

- 雑誌版 : Émile Zola, *Un mariage d'amour*, in *L'Artiste*, août 1867, p. 163-205 ; septembre 1867, p. 347-382 ; octobre 1867, p. 26-96. 以後、この雑誌からの引用はそれぞれ août, septembre, octobre とし、その後にページ番号のみを記すこととする。

- 初版 : Émile Zola, *Thérèse Raquin*, Paris : Librairie international, A. Lacroix, Verbœckhoven et Cie, éditeurs à Bruxelles, à Lipzig, à Livourne, 1867 (mais datée de 1868).

<http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k6514275b.r=therese+raquin+.langFR> 以後、この版からの引用は I とし、その後にページ番号のみを記すこととする。

- 第 2 版 : Émile Zola, *Thérèse Raquin*, Paris : Librairie international, A. Lacroix, Verbœckhoven et Cie, éditeurs à Bruxelles, à Lipzig, à Livourne, 1868.

<https://books.google.co.jp/books?id=5oItAAAAMAAJ&pg=PP5&dq=therese+raquin++1868&hl=ja&sa=X&ei=jRjqVLaLLYK8mgWxrIDwCg&ved=0CB8Q6AEwAA#v=onepage&q=therese%20raquin%20%201868&f=false> 以後、この版からの引用は II とし、その後にページ番号のみを記すこととする。

¹ Émile Zola, *Les Mystères de Marseille*, dans Émile Zola, *Œuvres complètes*, Cercle du Livre Précieux, tome I, 1962, 225.

² Émile Zola, *Correspondance*, tome I, B. H. Bakker (s.l.d.), Paris-Montréal : Les Presses de l'Université de Montréal-Éditions du CNRS, 1978, p. 471.

³ この計算は、『ルーゴン=マッカール叢書』に収められた小説 20 作の章を単純に合計して平均を出したものである。例えば、『ムーレ神父の過ち』のように 3 部構成で、それぞれの部が、17 章、17 章、16 章に分けられているものもあるが、今回は、部は考慮せず、章の数のみで算出した。

⁴ Émile Zola, *Correspondance*, *op. cit.*

⁵ Henri Mitterand, « Introduction », in Émile Zola, *Thérèse Raquin*, GF-Flammarion, 2008, p.24-28.

⁶ Colette Becker, *Les Apprentissages de Zola*, PUF, 1993, p.329.

⁷ 宮川朗子、同上書。宮川朗子「小説の技 ―ゾラ『ブラスサン征服』の連載版と初版から―」、『広島大学大学院文学研究科論集』、第 74 巻、2014 年 12 月掲載予定。

⁸ Étienne Brunet, *Le Vocabulaire de Zola*, tome I, Genève-Paris : Slatkine-Champion, 1985, p.434-436.

⁹ この全集はファスケル版を底本としているが、ファスケルは、第 2 版を出したラクロワの著作権を結果的に引き継いだ出版社（ラクロワの著作権を引き取ったのはシャルパンティエだが、そのシャルパンティエの所有する著作権をファスケルが引き継いだ。）であり、かつ一見したところ、我々が対象としている第 2 版と同一であるため、このブリュネの分析は、第 2 版についても十分有効であると考えられる。

¹⁰ *Ibid.*

¹¹ 参照 : août, 191 とそれに対応する II, 72 - 73, oct, 50 と II 224, oct, 79 と II, 279 など。

¹² 参照 : Charles-Pierre Girault-Duvivier, *Grammaire des grammaires, ou analyse raisonnée des meilleurs traités sur la langue française*, tome 2, 1840(9^e éd.), p.916. <http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k205602c.r=grammaire+des+grammaires.langFR>

Ch-Martin Bescherelle et Édouard Braconnier, *Réfutation complète de la grammaire de MM. Noël et Chapsal*, 1838, p. 125.

<http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k65266620.r=R%C3%A9futation+compl%C3%A8te+de+la+grammaire+.langEN>

C3%A8te+de+la+grammaire+.langEN

¹³ 『テレーズ・ラカン』の場合は、次の2例が挙げられる。Elle sentait pendant de longues heures ces baisers qui la brûlaient. (oct, 74) → Pendant de longues heures, elle sentait ces baisers qui la brûlaient. (II, 269) ; [...] elle avait depuis longtemps le désir de venir travailler avec elle (oct, 80) → [...] depuis longtemps elle avait le désir de venir travailler avec elle. (II, 280-281)

¹⁴ 身体的、生理的あるいは感覚的表現の加筆の例としては、ここまですら挙げた例の他、août, 194 とそれに対応する II, 77、oct, 39 と II, 202、oct, 40 と II, 204 などが挙げられる。

¹⁵ I, III